

H 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しすぎはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
	0	0	●	0	0

(3と解答する場合)

— 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

(注)
ラフカディオ・ハーンは日本人の表情について鋭い観察をのこした人である。彼があるとき三人の婦人と汽車に乗りあわした。彼女らは左の袂で顔をかくし、こくりこくり居眠りしている。それは「まるで流れのゆるい小川に咲いている蓮の花のようだ」とハーンは書いている。(『心』平井呈一訳)

寝顔が美しいかどうか、それは当人にはわからない、当人にわかっていることは、ひよつとすると不用意な顔をみせるのではないかということだ。(1) 不用意に自分の表情をさらけ出す、これがこまったことなのだ。少なくとも昔の女性のたしなみにはなかつたことだ。

袂で顔をかくすというのは、時には愁いを時には恥かしさを、つまりはあらゆる表情をひとに見せまいとするしぐさであつて、このしぐさが伝統的なつしみの表現であることはいうまでもない。

和服姿のめつきり少なくなつたトウコン、——それも「晴れ姿」のみで、着つけもろくにできない娘たちが、袂の袖で顔をかくすかどうか、そのようなことについて確かなことをいう自信はまったくないが、しかし、ハーンが袂の袖にかくされた顔を美しいと感じたことは確かだし、またこの姿態を日本人の微笑とむすびつけて考えていたのは、なるほど鋭い観察だつたと思われる。

ハーンはさきの話につづけて次のように言っている。「わたしの家で長年使っていた下男があつたが、この男のことを、わたしはふだんからしごく快活な、後生楽な男とばかり思っていた。物を言いかけると、この男はいつでもけらけら笑っている。(中略)ところ、ある日のこと、この男が自分ひとりであるときに、わたしはそつとのぞいて見て、まるでこの男が気のゆるんだ顔をしているのに驚いたことがある。いままでこつちが知っていた顔とはまるで打つて変つた顔つきなのだ。心の痛みと腹立ちのこわい皺があらわれて、年が二十も老けて見えた。わたしはエヘンと咳払いをして、自分のいることを知らせてやつた。すると、たちまちその顔がやわらいで、まるで若返りの奇跡にあつたようにはつと明るくなったのである。」(同上)

ひとは「この男」のこの笑いをどう解釈するか。① 従 ② 背と攻撃するか。それともお世辞笑いの欺瞞を指摘するか。それとも、例によつての不可解な日本人の笑いをうんぬんするか。ハーンはちがう。彼は言っている。「これなどは、じつに、ふだん自分を殺しつけている自製の奇跡である。」わたしもこれと同じ考えである。日本人の笑いは主として自製の笑いであると思う。自制がさらにきびしいばあいには、その笑いすら、袂の袖でかくしてしまふ。高らかに笑うことが不自然であると人が感じるとき、笑いはこのように抑制的なものになった。

微笑つまりエミと、それからワライとの区別をきびしくつけたのは柳田国男(注3)であつた。ワライにはかならず声があり、エミには少しもない。ワライのばあい、時には相手に不快感を与える。やさしい気持の伴っていないワライもある。それに反し「エミには如何なる場合もそういうことがない。是が明らかなる一つの差別(注4)であつた。」

〔女の咲顔えがほ〕

つまり柳田説によると、一座の中で笑っている人が若干おり、それとの同調でホホエンでいる人が、笑う人よりももつと数多くいたのだ。公然たる笑いではなく、むしろ「笑う人に向つての一種の会釈」だつたという。「こんなことに笑いこけるのは、はしたないと内心では思つても、自分ばかりつんとしては、反感を表示したことになる。人が楽しみ又はいい気になつている場合が、ことにまわりの者のエガオの必要な時だったので、是を(注5)雷同附和とは誰も見えないのである。」(同上)

個人差——というようなことは今はさておいて、ハーンや柳田が提示したような微笑、これは日本人固有のものであるか。(2)ある意味ではそうではないと思う。私の出会つた数少ない国々の人は、やはり共感の微笑をもらす。フランス語の *sourire* ということは、ほとんど正確に日本語の微笑にあたる。

イギリスのかなり格式ばつたパーティで、日本婦人が笑い——それもおそらくは微笑をかくすべく口もとを手でおおつたところが、それがはなはだ非礼としてとがめられたという話があるが、真偽のほどはどうであらうか。顔にしよつちゆう手をあてることが作法に a いないことは当然であらうが、しかし、笑いをかくす動作

を、もしかりに不作法だと思ふ人がいたとすればかなり人間の表情とその表現について鈍感な人ではあるまいか。会釈としての微笑はおそらくどの国の人びとにも共通の表情である。とはいふものの、たとえばさきに行ったフランス語の *sourire* には人を小馬鹿にしたうすら笑いという意味もあり、われわれの「微笑」にはそのような意味はすこしもないことには注意しなければならぬ。つまり、会釈としての微笑は、わが国では社会にひろく行きわたった自制としての微笑となっている。これは「文化」として、わが国にははっきり定着しているということだ。

だから、私たちは文化にしたがつて人の微笑の意味を正確に読みとるが、それは文化を異にする他国の人には、かならずしも正しく通じはしないということである。

柳田国男は微笑をけつして付和雷同の笑いではないといった。たしかに人につられて笑うといったものではないが、しかし、他人との同調がほとんど自発的とみえるくらいごく自然に行なわれている社会での、これは目立つた表情なのである。

私たちは長いあいだ微笑しつづけてきた。とりわけ「目上」の人に対して。それはほとんど第二の天性である。会釈としての微笑、これは外国人に理解される。しかし自制としての微笑、これは時にひとを感動させ、ときにひとをまどわせる。しかも、私たちは、自制としての微笑から、さらに内に屈折し、複雑化した「微笑」の笑いに移ってきた。

ハーンは微笑に自制心をみたわけだが、「微」というのは「小」に通ずる。「小股の切れあがった」とか「小手をかざす」とかいうときのあの「小」である。「小手」という手の部分があるのではない。それは手を「ちよつと」かざすという意味なのである。その「ちよつと」とは、抑制のきいた、自制心のあるという意味をおわせている。そういえば、人を呼ぶとき「ちよつと」と呼びかけるのは、呼びかけというどうしようもない不作法に対する和らげの気持からである。もつとも、今では「ちよつと」ということはもすたれてきたし、「小」は小生意気とか小ざかしいとか、悪い意味のものばかりが残っているような気がする。

抑制よりも攻撃の方に、力点がうつりつつある。これは文化としては一種のコウタイ現象⁽²⁾である。

(多田道太郎『しぐさの日本文化』による)

(注)

- 1 ラフカディオ・ハーン——小泉八雲。ギリシャ生まれの英国人で日本に帰化した文学者(一八五〇～一九〇四)。
- 2 後生楽——何も苦にせず、のんきなこと。
- 3 柳田国男——日本の民俗学者、官僚(一八七五～一九六二)。
- 4 差別——ここでは「区別」と同義。
- 5 雷同附和——「付和雷同」と同じ。

問

- (A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)
- (B) 線部(1)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
- 1 隠すべきものをあらわにして他人に気まずい思いをさせることになるから。
 - 2 近代化に伴い、鉄道旅行などで見知らぬ人の視線にさらされる機会が増えたから。
 - 3 何事にも控えめにふるまうことが求められてきた古来のしきたりに反するから。
 - 4 無防備な状態になって、予測することができない危険を招く恐れがあるから。
 - 5 自分が知らない間に自分の内面を見透かされてしまうことになるから。
- (C) 空欄①・②にそれぞれ漢字一字を補い、四字熟語を完成させよ。
- (D) 線部(2)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
- 1 動物としての人間の表情が普遍的だという意味では

2 筆者自身が知っている外国人が共感の微笑をもらすからには

3 上流社会の作法が国際的に共通しているという意味では

4 日本社会の微笑の意味が会釈だけに限られると考えるならば

5 日本人の微笑そのものが歴史的に変化している事実からすると

(E) 空欄 [a] にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 とまどって 2 かなって 3 こだわって 4 はずれて 5 まんで

(F) 線部(3)について。ここで言う「第二の天性」とはどのようなものか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 自分の意見がなく軽率に他人の説に従う性格

2 自分の身を捨てて集団の利益に奉仕する気質

3 自分にこだわらず相手の心情を察知する才能

4 自分の生命を守るために隷属を選択する本能

5 自分の感情を抑え相手に調子を合わせる習慣

(G) 線部(4)について。ここでの「ひと」の説明として最も適当な一続きの部分を本文中から抜き出し、句読点とも十字以上十四字以内で記せ。

(H) 線部(5)について。ここで言う「悪い意味のもの」に当てはまる語句として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 小耳にはさむ 2 小ざつぱり 3 小利口 4 小ぎれい 5 小首をかしげる

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

小学校四年生になる時、学級の編成替えがあつて、入学以来三年間、同じ組にいた仲間が散り散りになり、その時、新たに同じ組になった人たちの中に、神山五郎君というのがいた。このごろの東京弁に、「ださい」という下品な形容詞がある。播州弁ではこれを「鈍臭い」と言うのであるが、神山君は鈍臭い、依怙地な男だつた。この男が、一冊の粗末な本を逆も大事にしていた。『世界爬虫類図鑑』というのである。文庫本よりはやや大きいぐらゐの本である。蛇や蜥や亀や、この異類たちの白黒の写真が次ぎ次ぎに掲載してあつて、神山君はそのページを、ほんの一瞬、べらべらッとめくつて私たちに見せてくれるのだが、併しそんなことがあつても、各ページごとを、ゆつくり見せてくれるというのではないのだつた。私はその「べらべらッ」を見せられるたびに、その凶鑑をゆつくり見たくて見たくて、うずうずしていた。

ある午後、思い重なり、私の『少年宮本武蔵』と交換に、その『世界爬虫類図鑑』を貸して欲しいと申し出た。神山君は渋つた。私を振り切つて、帰ろうとした。が、母親に「あんたは、蛇のようにしつこい。」とよく言われる私は、執拗に、ねばりにねばつた。すると神山君は渋々ながら、ついに貸してくれた。

ところが私が神山君から借りた『世界爬虫類図鑑』を、その数日後、学校で盗まれてしまった。何日か家でたつぷり異類たちの写真を楽しみ、返却約束の日に、学校へ持つて行つたのである。休み時間に、神山君に手渡そうと思つてズック鞆を開けると、なかつた。いくら捜しても、なかつた。私は困惑した。おろおろした。神山君は私が本を紛失したことはまだ知らない。併しないものは、ないのである。と云うて、私は先生に訴えるようなこともしたくなかつた。学校が終るまで、私はぐずぐずしていた。

神山君は、私の『少年宮本武蔵』をちゃんと持つて来ていた。それを私の前に示し、凶鑑を返してくれるように言つた。私はキュウした。が、ことその場に到れば、より歴然と、も早なくなつたものは、なくなつたものであつた。腹を決めて、神山君に謝罪した。盗まれたとは言わなかつた。言えなかつた。神山君は私を咎めなかつ

た。ただ、だまって私を見詰めていた。光のない、大きな目だった。唇がぬれていた。その果てに、「じゃ、お前の本は、わいがもらう。」と言って、背を向けた。

私は半ば救われたような気がした。が、神山君への失望は残った。私の大事な本を横取りされたような気が、いつまでも尾を曳いた。けれども、それはさすがに口には出来ないことだった。頭の中では逆怨みだとは分かっていたが、どうにもならない怨めしい気持だった。ところが不思議なことに、私から本を盗んだ犯人には、怨めしい気持は湧いて来ないのだった。これもまた気味悪いことだった。

数日後、この顛末の一部始終を、家で父と母に話した。すると父が「はあ、それはその本を盗ったんは、その神山いう子ウやな。」と言った。私は「あッ。」と思った。父は恐ろしいことを言う人だと思った。が、もしそれがそうだとするならば、神山君はもうあの『世界爬虫類図鑑』を学校には持って来られないし、人にも見せることは出来ない。本来は自分の本を、盗本として持つのは変てこな気持だろう。神山君が盗んだ『世界爬虫類図鑑』を自分の家で、こっそり見ている姿が、くり返し目に写った。私の『少年宮本武蔵』を見る姿も、写った。

が、父の言葉には何の裏づけもないことである。寧ろ根も葉もないジャスィである。けれども、自分の本を神山君に持って行かれた私は、心の中で父の言葉をまったく否定し切ることも出来なかった。あの日、私の鞆の中に図鑑が入っているのを知っていたのは、神山君一人だけだった。神山君が誰かにしゃべっていれば、別である。その後、神山君も私も小学校卒業まで、も早このことにふれることはなかった。

(2) 校区の関係で、神山君と私は別の中学校へ進んだ。ところが高等学校で、またいっしょになった。入学式の日、その姿を見かけた私は、いやな気持がした。併し神山君は私の顔を見るなり、「おえ、わしはお前の本、まだ大事に持つとどうど。」と言った。その時はじめて、私は自分が神山君にとってかけ替えのないものを奪ったのだということを知らされた。神山君の物言いが、「わいの爬虫類図鑑、返してくれや。」と言っているように、聞こえた。

いや、もしかしたら、神山君は自分で爬虫類図鑑を盗んだ上で、さらにそう言っているのかも知れなかった。

そうだとするならば、神山君は余程の悪だということになる。併し私にはそうは思えなかった。(3) 種の悪は、他の場面でも色濃く臭うはずである。神山君には、そういう臭いはなかった。寧ろ私には、神山君の言葉が、私はまだ『世界爬虫類図鑑』を隠し持っていて、返さないのであると言っているように、聞こえた。そもそも、お前にとつてはさほど大事でもない『少年宮本武蔵』を差し出して、俺の『世界爬虫類図鑑』をせしめたのだろうと言っているように、響いた。

併しそれがそうではないのは、神山君が本を盗んだのかどうかを、私が問い糺すことが出来ないのと同様に、神山君にはあれこれ言い訳がましいことは、言えないことだった。神山君の口ごもるような「お前の本、まだ大事に。」という物言いに、切実な怨めしさがこもっていた。やはり図鑑は神山君にとつて、決定的に大事なものであったのだらうと思わないわけには行かなかった。あの図鑑の魅力は私も味わい、そして何より重大なのは、私が神山君には忘れ得ないほどに大切なものを借りて失った、ということだった。そうになると、私はさらに辛いものを覚えた。

私たちの高等学校は、世間の評価では「出来ない子」が行く学校、という烙印を捺されており、「出来る子」が行く学校は、姫路の旧市街の方にあるのだった。卒業後は過半が就職するのであるが、四分の一ぐらいは進学希望だった。三年生の二期にもなると、いよいよ身近に迫って来る就職や大学受験を目の前にして、生徒たちの中には、異常な集団ヒステリーが発生していた。

誰かが鉛筆を落とす。すると、同時に「いよッ、カミヤマッ、おほほ、ほッ。」と集団で絶叫するのである。誰かが服の袖口を机に引つ掛ける。するとまた「いよッ、カミヤマッ、おほほ、ほッ。」と叫び、笑う。すべて神山君には何の関係もないことであるが、誰がどんな小さなしくじりをして、「いよッ、カミヤマッ、おほほ、ほッ。」という絶叫の渦が起る。まして当の神山君が何か言おうとして、口を詰まらせでもしたら、さらに輪をかけた、面白半分・真面目半分の大絶叫と哄笑が起こった。

みんな就職・進学を間近に控えての、極度の迷いと無力感に堪え得ないで、その場限りの気晴らしを求めている

るのだった。絶叫の最後で「おほほ、ほッ。」と一ト息、息を吸う呼吸が揃うか揃わないかが、この集團物狂いのわざの見せどころ、味わいどころなのである。当節はやりの言葉で言えば、「いじめ」であろう。

いや、集團物狂いとは言うても、そういう奇体な笑い声を発するのは、ほぼ姫路の都市部から電車で通学して来る生徒たちであつて、それに付和雷同する手合いをふくめると、それがクラスの三分の二を占めており、私たち農村部出の生徒たちは、ただだまつて見ているのだった。間近に近づいて来る破局を控えて、併しその日その日は単調な、何の変もない、そうであるがゆえに堪えがたい日常にくさくさし、刺戟を求めて、神山君を的に掛けるのだった。

神山君は絶叫が起こると、私が本をなくして謝罪した時と同じように、光のない、大きな目を静止させて、じつと中有を見ていた。神山君の魂のもつとも深い部分には、恐らくはあの失われた『世界爬虫類図鑑』がひそんでいた。絶叫ぼけたたちは、その神山君の中に隠されたものの臭いを嗅ぎ当てていたのである。が、私は私でその絶叫が起こると、くり返しあの図鑑を失った日のいやな思い出を、刺し貫かれるのだった。私もまたあの『世界爬虫類図鑑』を私に楽しんだ男だった。

神山君は高等学校卒業まで、数ヶ月、その絶叫については、ついに一ト言も言葉を発しなかった。この亀裂に、だまつて堪えた。神山君の中の『世界爬虫類図鑑』が堪えさせたのだろう。まばたきしない、光のない目で、宙を見ていた。卒業後は関西の某私立大学へ進んだと聞いたが、その後の消息については何も知らない。

だが、それから二十数年を経て、私は東京神田の古本屋で不意に、あの『少年宮本武蔵』に出喰わした。よもやの出来事だった。あの伊藤幾久造の絵の生々しさは、少年時代以来、私はいまに忘れ得ない。猫の目のような少年宮本武蔵である。その時、余程求めようかと思うたが、併しあの『世界爬虫類図鑑』が出て来ない限り、これは神山君が持ち去つたものだと思うて、その場を去つた。

(車谷長吉「めつきり」より)

問

- (A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)
- (B) 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。
- (C) 線部(1)について。このとき「私」は、なぜ「盗まれた」と言えなかったのか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
- 1 鞆のなかに本があるのを知っているのは「私」と神山君だけなので、「盗まれた」と言ってしまうと神山君が犯人だと言っているのと同じになると考えたから。
- 2 「盗まれた」という言い訳をすると、本が紛失した責任を自分以外の第三者に押し付けて自分も被害者の立場に逃げ込んでしまうことになるから。
- 3 本を盗んだのは神山君なのではないかという疑惑が払拭できない以上、事実関係がはっきりするまで「盗まれた」ことを伏せておくのが得策だと思ったから。
- 4 「盗まれた」という事実をありのままに話したら、本をあれほど大事にしていた神山君の気持ちを踏みにじり深く傷つけてしまうことになると感じたから。
- 5 たとえどんなに大切にしていた本だとしても所詮は一冊の図鑑に過ぎないのだから、率直に謝れば許してくれるのではないかという期待があったから。
- (D) 線部(2)について。高等学校の入学式で神山君を見かけた「私」はなぜ「いやな気持がした」のか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
- 1 本を紛失したことを神山君から責められる日々が再び始まると思ったから。
- 2 久しぶりに会った神山君の表情に再び自分を陥れようとする悪意を察知したから。
- 3 神山君から「わいの爬虫類図鑑、返してくれや。」と言われるような気がしたから。
- 4 自分の心の奥底にしまい込んでいた小学校時代の苦い思い出がよみがえってきたから。

5 本を紛失したあと真相を曖昧にしたままやり過ごした自分が情けなかったから。

(E) ——線部(3)について。「その種の悪」とはどのような悪か。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 自分が最大の被害者であるかのような顔をして、周囲の同情を集めていこうとする悪
- 2 相手の弱みにつけ込んで接近してきて、相手が何より大切にしているものを奪おうとする悪
- 3 相手を責める言動を取らずとも、相手が勝手に自責の念に囚われるように仕向ける悪
- 4 自分で自分のものを盗んでおきながら、それを第三者がやったことのように見せかける悪
- 5 相手を策略にかけておきながら、自分を被害者の立場に置いてその相手をいたぶる悪

(F) ——線部(4)について。この一文は作品の結末としてどのように解釈することができるか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 自分は神山君の『世界爬虫類図鑑』を紛失したことに苦しんでいると思っていたが、本当は自分自身が大切にしていた『少年宮本武蔵』を取られたことが悔しかったのだと自覚する過程を表現している。
 - 2 古本屋で見つけた『少年宮本武蔵』を買えば神山君との苦い記憶を忘れられるかもしれないと思うと同時に、あのと看のことを忘れてはならないのだと言いつ聞かせて自分を奮い立たせるようすを表現している。
 - 3 『世界爬虫類図鑑』を盗んだのは誰だったのかという疑念がいまも「私」のなかにわだかまっている事実と、これからもあの苦い思い出を忘れることはないだろうという予感を同時に表現している。
 - 4 二十数年を経て『少年宮本武蔵』に出会った瞬間、あの『世界爬虫類図鑑』を盗んだのは神山君だったに違いないという確信が芽生え、これまで抱いていた罪傷感が溶解していくようすを表現している。
 - 5 大切にしていた『少年宮本武蔵』の表紙を見て懐かしさがこみ上げる一方で、あの『世界爬虫類図鑑』に出会うまでは神山君との間に起こった出来事を忘れるわけにいかないと決意するようすを表現している。
- (G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 高等学校のクラスで神山君を気晴らしの標的にしていたのは都市部の生徒たちであり、農村部の生徒たちは黙ってその屈辱に耐えるしかなかった。

ロ 高等学校時代の神山君は、たとえ周囲から「いじめ」の標的にされても光のない目で宙を見つめるだけで、周囲の絶叫に対してけっして動じる素振りを見せなかった。

ハ かつての「私」は「その本を盗った人は、その神山いう子ウやな。」と言った父を恐ろしい人だと思っていたが、いまにしてみるとその言葉は正しかった。

ニ 「私」はいつも『世界爬虫類図鑑』のページを練りながら心をときめかせたことを忘れていないし、神山君の失望の大きさも想像することができる。

ホ 『世界爬虫類図鑑』を失くしたことを素直に謝ったのに『少年宮本武蔵』を返してくれなかった神山君を恨めしく思う気持ちは、いつも「私」のなかに渦巻いている。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

隅田川のこなたに浅茅が原といふ所あり。そのわたりにいほりしめて、年久しく住めるひがおぢの有りける。

このおぢ、唐事(注2)をこのみて、何ごとにも唐々(からか)といふくせなむ侍り。中にも莊子(ちゆうじ)が風俗(ふうぶく)をめでて、心さへ身さへただこれになむなれとぞ学ばひける。それにつきては、常にはかなくをかしきふるまひども多かり。

春も(5)きさらぎの末つかたに、おのが住むあたりの畠(はたけ)どもには、青菜の花咲きみちて有るに、かは(注3)ひらごの多く飛びめぐるを見つつ、かの無我有(むごう)の郷(さと)といひけん境(さかい)を思ひめぐらして、つらつら見をりけるが、いとうららにさしわたる春の日かげにこころよくあたたまりつれば、ねむたくなりてや、しばしばうなづきけるが、終に打ちたふれて寝にけるを、友どちの中に物あざむきする男の来たりあひて、このおぢの寝いりたるをよき事と思ひ、かはひらごひとつをととりて、羽(注5)がひを少し悩めて飛び行くまじくし、そとぬきあしをしておぢが胸のあたりをねらひて打ちこみ、(7)我はこなたの一間に立ち隠れて、空寝をしてうかがひ居るに、おぢはやがておきあがりて、おもしろき夢(8)や見つらむ、ひとりごちつつ、「あやあや、我は今無我有の郷に遊び居りしよ。実にしかり、実にしかなり」とて、頭を動かして喜ぶ(9)さまじければ、なほひそまりて見をるに、かのふところに投げ入れたりしが、胸のあたりにはひあがりて、糸りにとりつきなどし、羽を打ちあはせて飛ばむとするさまを見付けて、「さてな。我(注6)やこれか、これが我なるか」とて、しばし見をりしが、手に取りすゑて、かの羽がひのいたみたりし所を見付け、「これこそ夢のまにまに少しもたがはね」とて、(10)膝をうちておどろきうごく。さるは、飛びそこなひて空より落ちつる夢や見つらむと思ふに、をかしくなりたれば、口をふたぎて逃げかへりしとなむ。(11)

『折々草』による

(注) 1 ひがおぢ——頑固者の老人。

2 唐事——中国の学問、風習、風俗など。

3 かはひらご——蝶の古名。

4 無我有の郷——正しくは「無何有の郷」。荘子が説いた理想郷で、人為を加えぬ自然のままの世界。

5 羽がひ——羽のつけ根。

6 我やこれか、これが我なるか——『莊子』齊物論篇にある、蝶になった夢から醒めた莊周（莊子）が、「知らず、周の夢に胡蝶と為れるか、胡蝶の夢に周と為れるかを」と言つたという話を踏まえた表現。

問

(A) ——線部(1)の現代語訳を四字以内で記せ。(ただし、句読点は含まない)

(B) ——線部(2)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 信仰を深めて 2 井戸を掘らせて 3 居座り始めて 4 物思いに耽つて 5 草庵に住んで

(C) ——線部(3)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 思想や行動 2 伝統や制度 3 顔立ちや装い 4 世相や流行 5 風習や文化

(D) ——線部(4)の解釈として最も適切なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 身体は弱いが潑刺とした行動 2 あさはかで滑稽な行動

3 ひかえめで趣深い行動 4 浮世離れして風変わりな行動

5 頼りなくも可愛らしい行動

(E) ——線部(5)を漢字で記せ。(ただし、楷書で記すこと)

(F) ——線部(6)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 のどかにあたりを広く照らす春の日光 2 明るく刺すように照りつける春の日光

3 のんびりと少しづつ移動する春の日陰 4 ほんのりとあちこちにできた春の日陰

5 やさしく周囲に広がっている春の日陰

(G) 線部(7)が指し示すものとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 筆者
- 2 ひがおぢ
- 3 友どち
- 4 物あざむきする男
- 5 かはひら

(H) 線部(8)の文法的な説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、記号で答えよ。

- 1 「見」は動詞、「つ」は完了の助動詞、「らむ」は推量の助動詞
- 2 「見」は動詞、「つ」は完了の助動詞、「ら」は完了の助動詞、「む」は推量の助動詞
- 3 「見」は動詞、「つら」は完了の助動詞、「む」は推量の助動詞
- 4 「見つ」は動詞、「らむ」は推量の助動詞
- 5 「見つ」は動詞、「ら」は完了の助動詞、「む」は推量の助動詞

(I) 線部(9)について。「ひがおぢ」はなぜ喜んだのか。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 莊子が理想郷とした「無我有の郷」に、これからは他の人も連れて行けるから。
- 2 莊子が理想郷とした「無我有の郷」に、自分も夢のなかで行くことができたから。
- 3 夢の中の「無我有の郷」で蝶となって遊んだことで、理想とする莊子を超越できたから。
- 4 夢の中で見た「無我有の郷」が、これまで想像していた以上に楽しい場所だったから。
- 5 夢で自分も「無我有の郷」を訪れたことで、莊子がなぜそれを理想郷としたのかを悟ったから。

(J) 線部(10)について。その行動をするに至った理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 蝶を手にとった際に傷つけた羽を見つけて、夢のなかのお告げが少しも外れなかったことに気づいて、感激したから。
- 2 胸のあたりにはいあがつて飛ぼうとする蝶を見つけ、自分が蝶なのか、蝶が自分なのか夢と現実の境が分

からなくなつて、混乱したから。

3 蝶の羽が傷んでいるのを見て、自分の夢の内容と現実の蝶の様子とが一致していることに気づいて、うれしくなつたから。

4 夢から覚めた直後に見た蝶の羽も、夢の中で手に取つた蝶の羽も同じく傷んでいることに気づいて、動揺したから。

5 夢で見た蝶が現実にも現れたことで、莊子の教えがやはり正しかつたことに気づいて、その素晴らしさに感じ入つたから。

(K) ——— 線部(II)について。その行動をするに至つた理由として最も適當なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 いたずらに引つかかつた「ひがおぢ」の行動が当初の予想をこえるものであつたため、笑いをこらえきなくなつたから。

2 自分が仕掛けたいはずらの思惑通りに行動する「ひがおぢ」を見て、あわれでいたたまれない気持ちになつたから。

3 「ひがおぢ」が困惑する様子を目の当たりにして、いたずらを仕掛けた自らの罪深さを反省し、決して口外してはならないと思つたから。

4 自分のいたずらのせいで「ひがおぢ」がした思いがけない行動の真意をはかりかね、だんだん恐ろしくなつてきたから。

5 どんなにいたずらされても莊子の教えを守り続ける「ひがおぢ」の趣深い行動に根負けし、退散せざるをえなくなつたから。

【以下余白】

